

PROGRAM

ブラームス:ドイツ・レクイエム op. 45

Johannes Brahms: Ein deutsches Requiem, op. 45 (A German Requiem)

- I. 苦しみを抱える人は幸いです
Selig sind, die da Leid tragen
- II. 人はみな、草のよう
Denn alles Fleisch, es ist wie Gras
- III. 主よ、お教えてください
Herr, lehre doch mich
- IV. あなた様のおわします家のなんと心地よいことか
Wie lieblich sind deine Wohnungen
- V. あなた達は今悲しみにくれているのですね
Ihr habt nun Traurigkeit
- VI. ここに彼らの永遠の地はありません
Denn wir haben hie
- VII. 天に召されたもの達は幸いです
Selig sind die Toten

指揮・芸術監督: 佐渡 裕 Yutaka Sado, Conductor & Artistic Director

ソプラノ: 並河 寿美 Hisami Namikawa, Soprano

バリトン: キュウ・ウォン・ハン Kyu Won Han, Bariton

合唱: オープニング記念第9合唱団 Opening Beethoven 9th Commemorative Chorus

管弦楽: 兵庫芸術文化センター管弦楽団 Hyogo Performing Arts Center Orchestra

2012 1/20(金)・21(土)・22(日) 3:00PM開演
兵庫県立芸術文化センター KOBELCO 大ホール

主催: 兵庫県、兵庫県立芸術文化センター

3分ですぐわかる 今回の聴きどころ

テーマは「命とはなんと尊く、希望に満ちたものなのだろう」

教会音楽としての鎮魂曲ではなく、コンサートで演奏し、みんなが生きることの意味や人間の尊厳などについて思いをはせるための曲。ブラームスの「ドイツ・レクイエム」は、新旧約聖書の言葉をテキストにしながらも、全人類愛的な眼差しで私たちを包み込んでくれる作品だ。そこには人としての尊厳や神に頼ってしまう精神的な弱さ、湧き上がってくる希望などがあり、音楽を聴きながら言葉へと目を走らせて、考えるための時間を与えてくれる。さまざまなことが心を震わせた2011年だったが、音楽とはその人それぞれの状態によって、その存在意義を大きく変えるものだ。今だからこそ、この曲の訴えるメッセージを歌詞から受け止める必要があるかもしれない。

作品へ深く共感する音楽家たちが、ブラームス観を変えてくれる

メッセージの強い音楽は、共感する音楽家と聴衆によって、さらに存在感を増していく。そうした意味で、震災からの復興をという大きなメッセージを発信してきたこの劇場と、そこに集う音楽家たちが「ドイツ・レクイエム」の演奏に込める想いは格別だろう。東北へも音楽を届けたマエストロ佐渡、メンバーは替わっても創立からの“想い”を受け継いできたPACオーケストラ、そしてオープン時の伝説的な「第九」を歌った合唱団、言葉をじっくりと伝えてくれる2人のソリスト。初めてこの大作を体験するという聴き手にも、その深みが伝わることだろう。ブラームスという作曲家の、あたたかい人間味にも感謝を。これからは交響曲などの聴き方が変わるかもしれない。

オヤマダアツシ(音楽ライター)